

京都・平安京西市跡

- 1 所在地 京都市下京区西七条北衣田町 北西野町
 - 2 調査期間 一九七七年(昭和52)一〇月～七八年四月
 - 3 発掘機関 京都市埋蔵文化財研究所
 - 4 調査担当者 鈴木久男 平田泰 家崎考治 辻裕司 辻純一
 - 5 遺跡の種類 都城跡
 - 6 遺跡の時代 平安～鎌倉時代
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 - 8 木簡の釈文・内容
- 中村敦 吉川義彦 百瀬正恒
- S E 10 出土木簡
- (1) 「\承和五千文安繼」 108×23×4 033
- (2) 「\承和六貫文」 89×21×3 031
- .「勘有名」
- 包含層出土木簡
- (3) 「□」 道守□□

西市跡の発掘調査は、地下共同埋設溝の建設に伴う調査として、一九七七年一〇月から翌年四月にかけて行つた。七条通の道路内に、10m×5m規模のトレンチを基本に、八個所開け、約400m²の発掘を行つた。

木簡の出土したトレンチは、西大路七条の交差点内にあり、平安時代前期から鎌倉時代の各遺構が重複して検出された。平安時代の遺構は井戸二基、溝、土壙、祭祀遺構などで、木簡は井戸S E 10から三点、最下層遺物包含層から一点の計四点出土した。S E 10は一边0・5mの方形縦板組み井戸で、深さ一・六m残存していた。井戸埋土は四層に分層され、木簡は三点共第二層から出土したが、埋土の各層間には土師器の型式差がなく、短期間に埋没したものと考えられる。出土遺物には土師器杯・皿・甕・黒色土器杯・須恵器杯・蓋・甕・綠釉陶器皿・杯・灰釉陶器皿・杯など、木器では盤・曲物・杓子・箸・櫛・下駄・削り掛けなどがある。墨書き器には、「殿」・「出」などがある。土師器・黒色土器の内面に刻線を持つものが多い。銅錢は隆平永宝一枚・承和昌宝三四枚・長年大宝一枚・饒益神宝一枚・不明一枚の計五三枚が出土した。

1、2の木簡は付札で、井戸内から出土した承和昌宝三四枚中、三〇枚は井戸底からまとまって出土した。トレンチ全体では二〇八枚の皇朝十二錢が出でし、和同開珎から乾元大宝までの全てがそろっていた。このことと、1・2の木簡の出土は市の性格をよく示す遺物である。

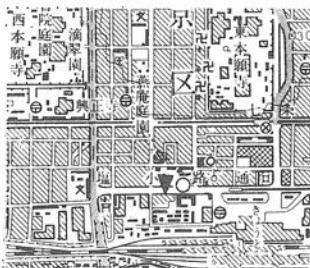
(百瀬正恒)



204×20×5 051

108×23×4 033
89×21×3 031

京都・平安京左京八条三坊跡



- 1 所在地 京都市下京区西洞院通り塩小路上ル東塩小路町
- 2 調査期間 一九七八年(昭53)四月～六月
- 3 発掘機関 京都市埋蔵文化財研究所
- 4 発掘担当者 丸川義広 辻純一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の時代 桃山時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 8 木簡の釈文・内容

京都市埋蔵文化財研究所では一九七八年四月から六月にかけて、京都市下京区西洞院通り塩小路上ル東塩小路町において、下京区役所移転に伴う発掘調査を実施した。現場は西洞院通りと塩小路通りの交差点の北東隅で、平安京の左京八条三坊にあたる。

調査の結果、調査区の西半分に南北方向の河川跡「西洞院川」を、東半分に五基の井戸跡を検出し、また多くの遺物の出土をみた。西洞院川は幅一一m以上、深さ二mあり、埋土中に多量の遺物を包含していた。出土遺物のうち、土器には土師器・瓦器・陶器・磁器等が、木製品には曲物・漆器・折敷・箸・櫛・物差し

・下駄等が含まれていたが、特に多様な木製品は当時の生活文化を知る貴重な資料として注目された。これらの遺物は、近世の中でもほぼ桃山時代に属するものである。
これら出土遺物の中に二点の木簡が含まれていた。木簡一は西洞院川跡の埋土第四層から出土し、木簡二は西洞院川跡の埋土第五層から出土した。

- (1) 「く早瀬喜衛門尉」
・「く鱗廿本入」
•「く五太刀弁×
- (2) (132)×28×4 033
106×20×4 033

また、二点の木簡の切り込み上部には、木簡一では片面に「仝」が、木簡二では両面に「●」の墨書の記号をもつ点も興味深い。

さて、以上二点の木簡は、その形態や墨書の内容からみて、地方から京都に運ばれてきた物資に伴うものと考えられ、近世初頭の京都における商業活動を知る貴重な資料といえよう。さらに、木簡二にみえる「越前北庄」は戦国大名柴田勝家の居城で、寛永元年(1624)に現在の福井と改称されている。この点で、今回河川から出土した遺物群は、ある程度実年代の推定が可能となり、その資料的価値は大きい。